

ガイドの運転する車でオフロードのような所をガンガン飛ばしたりして最後のプライスカanyon国立公園を訪問。岩塔が無数に屹立するこの眺めもまた迫力がある。これを天空から眺めるトレッキングもされたということだ。どこもアメリカの自然のスケールの大きさを感ぜさせる。起点のラスベガスは、そうした大自然の中に人工的に作られた街であるが、その対比が面白い。自分が行ったような気分になる楽しい時間となった。富澤さんありがとうございました。(荒井記)



プライスカanyon

1月初詣山行

夏原 寿一

実施日：1月11日（金）

参加者：10名（写真参照）

集合場所に向かう電車から富士山が見える、空気は澄んで青空が広がる、これぞ東京の冬だと言わんばかりの快晴だ。

二俣尾駅から線路沿いに歩いて3分ほどのところに登山口がある。そこを通りすぎて少し先の古刹・海禅寺に詣でる。境内の紅梅が咲き始めていた。登山口に戻って車道をしばらく進むと人家もなくなり山道になる。小さな沢を2、3回渡り返していくと分岐に出た。正面は青梅丘陵の稜線に直接出る急な階段の道だ。左への緩い道をたどるとすぐに名郷峠に着いた。峠は陽当たりがなく、北側から吹き上げてくる風も冷たいので早々に三方山(さんぼうやま)に向かう。こまかいアップダウンのある尾根道には要所要所にトラロープが張ってあって注意を促している。道中、根こそぎ倒れている大木が何本もあって、倒れるときの様子を想像しながら歩く。途中で山座同定などを楽しみながら行くと、二等三角点のある三方山に到着。

頂上は、昼食にするには狭いので少し先の展望台まで足を延ばした。そこには案内板があって、その写真には奥武蔵の山々は勿論、男体山まで写っているほどの眺めのいい所だ。さて、広げられたシートにはレタスの敷かれた紙皿が並べられ、お持たせの蓮根の鶏肉挟み焼、ミニトマト、焼きリンゴなどが盛り付けられる。加えて八海山酒造の甘酒！ 甘酒は、荒井さんと渡邊（貞）さんが持参のバーナーと鍋で温めてくれた。

体も暖まり、お腹もいっぱいになったところで尾根道をなおも進むと石神前駅への分岐に到着。当初はこのまま駅に下る予定だったが、時間にゆとりがあるので10分ほど先のベンチのある広場

まで行くことにした。そこは風も当たらず暖かい午後の陽射しが心地よい。ベンチに腰を下ろしておしゃべりしたり、草の上に寝そべったりして、それぞれにゆっくり過ごした。



後列左から一富澤克禮、夏原寿一(CF)、小林敏博、渡邊貞信(SL)、荒井正人
前列左から一島田稔、瀬戸英隆、渡部温子、鳥橋祥子、川口章子

◎野口秋人（1909年～1989年）

最初にお会いしたのは上高地の山研で今井田さんの学友（岳友）として、また東九州支部長としてとしてのお付き合いが始まったのだが、より親交が深まったのは1986年（昭和61年）11月1～3日に別府で開かれた自然保護全国集会で、東九州支部長として主宰されたことによる。この全国集会では、祖母、傾両山の国有林皆伐の惨状を視察し、それを踏まえて翌年11月14～15日に八王子大学セミナーで開催した全国集会での「森林保護の提言」の発表につなげた。林野庁の政策転換、日本山岳会の高尾の森発足に道が開かれた重要な集会だった。（註1）

一時大分に駐在していた松田雄一さんによると、野口冬人支部長は「甲状腺疾患、パーキンソン病の権威で学会の会長も務め、当時皇太子妃だった美智子皇后の主治医だったこともあった。」

（註1）林野庁は膨大な赤字を抱え、営林署長は地元の利益を無視し、勤務中にいかに利益を上げる、あるいは赤字を少なくするなどを旨としていた。祖母、傾の国有林も頂上の一列だけを残して皆伐、名水と言われた湧水はすべて涸れてしまった。我々の視察にはNHK大分の記者、カメラマンも同行し、惨状を映すとともに私の「森林は公共のものであり、溪谷、川を潤し海も豊かにする」という談話がニュースとして九州地区に流された。

同じ時期に、北海道の知床で林野庁による原生林の間伐が計画され、これに反対する人たちが伐採候補の大木に自分の体を縛り付けて妨害する姿が全国ニュースで流され、全国的な伐採反対運動に発展して、林野庁の政策転換を促した。そして大森理事の時代、大学先輩の橋本龍太郎蔵相の時に、林野庁の独立採算は廃止され、国有林は一般会計に組み入れられた。残念ながら野口さんは1989年10月に逝去されて林野庁の改組は見届けられなかった。

◎村山雅美（1918年～2006年）

最初にお会いしたのは遅く1984年（昭和59年）2月15日で、浦賀の造船所での商船学校の練習帆船「日本丸」の進水式である。いまの天皇陛下が皇太子の時代で、美智子妃とともに臨席された。帆船「日本丸」は2代目で、初代は1930年神戸の川崎造船所で建造されたが、その頃の日本人の体格に合わせて世界標準より小ぶりに造られていた。2代目の「日本丸」は世界標準の帆船として建造された。村山さんは運輸省の代表として上座におられた。（註2）

村山さんが山岳会のために活躍されたのは1953年のマナスル隊の装備で、日本では準備できないザイルなどスイス登山用品の輸入商だったリーベルマンと交渉している。またシェルパ集めのために三田隊長とともにダーズリンにヘンダーソン夫人を訪れ、サーダーにギャルツエン、コックにパンジーを紹介されている。三田さんにとっては懐かしいダーズリンとカンチェンジュンガ再会で、カンチェンジュンガの威容に圧倒されたと村山さんが会報『山』377号で述べているが、ヘンダーソン夫人との面会では畏敬の念を持っていたアンタルケー（註3）を従僕の様態に扱っていたと驚いている。

村山さんは南極点探索で活躍されたが、その萌芽は中学時代に英国の南極探検隊員の先生に出会ったことも関係しているようだ。村山さんは小学校から東京師範付属に入学、続く付属中学の英語の先生がオードリーという英国南極探検隊員で、1915年に英国による南極探検船が氷に閉ざされて難破したとき、シャックルトン隊長の指揮のもと、苦難の末に全員生還した時の隊員の一人であった。その先生から懐中時計のガラスのかけらと長針を「このガラスは山で遭難したときに反射鏡として使う」とプレゼントされたという。村山さんと南極の縁の始まりといえよう。

(註2) 現代の商船はエンジンで動いており、練習船も最新式のエンジンで動く船の方が実用的だと思われるが、現役の船長や航海士は「エンジンで走る船では海の豊かさはわからない。帆船は波を切る音だけで静かに進み快適で、海の豊かさを実感できる。帆船で世界を航海した記憶は人生の宝物のような思い出として残る。」と言っている。

(註3) アンタルケーは1930年代に英国エベレスト隊にキッチンボーイとして雇われ、頭角を現し、8000メートル以上の高度まで荷揚げをするタイガーの称号を得た名シェルパで、戦後は1950年のフランス隊のサーダーとしてエルゾグ、ラシュナルの二人が初の8000メートル峰登頂のときに活躍した名シェルパの代表格である。村山さんによるとハリスツイードの上着を着て、パイプをくわえたダンディーな人だったという。アンタルケーを代表とする戦前型シェルパは、頂上登頂は旦那の仕事としてサポートに徹しているが、戦後にはテンジンに代表されるように隊員と一緒に登頂を目指すシェルパが現れ、さらにはエベレスト登頂をガイドすることを職業とするものまで出て、シェルパと言えないまでに進化？変貌した。

悼 大山恭司さん、有難う。そして、さようなら。

近藤 緑

長生きするにつれて、年度末になると届く「喪中につき年賀欠礼いたします」の葉書が多くなる。それが会ったこともない縁者の死ならまだしも、お世話になったご本人の死を告げるものだとショックが大きい。

大山恭司さんの逝去を知ったのも、昨年末にもたらされた牧子夫人のご挨拶状からだった。消息が絶えてから、自分の身边に起こった連れ合いの発病や私自身の手術入院に続くリハビリに追われ、湘南のホームに入られた大山夫妻を訪ねることもなかった。申し訳なさに身が縮む思いがする。

かつて自然保護委員会や緑爽会に属し、フォトクラブでも活躍した大山さんを覚えている会員は多くないかも知れない。

2006年に20周年をもって幕を下ろした「自然と人間の暮らしを考えるフォーラムIN」(事務局 蜂谷緑・清野礼子・大山恭司)という活動があった。昭和の終わりから平成にかけてのその時期は、高度成長期でもあって全国に林道建設やゴルフ場建設の自然破壊が続出していた。JACの各支部でも開発の波にさらされる郷土を憂う人達の危機意識が高まり、反対運動が広がって行った。

都会にも自然保護活動に共鳴してくれる人たちが沢山いた。かつて演劇の世界に首を突っ込んでいた私には、小劇団で活動する友人がいたし、邦楽アンサンブルを主宰する姪の回りには、若手演奏家たちが集まっていた。みんな世の為、人の為なら、と無償で力を貸してくれた。問題を抱えた現地に行って、自然保護啓蒙の講演会やシンポジウムを開催するのだが、その前座としてのアトラクションは各地で大歓迎された。

貸切バスに参加者も出演者も定員一杯詰め込んで、どこへでも乗り込んで行ったものだった。支部では宿舎やイベント会場の手配、地元へのPR等、準備万端整えて迎えて下さった。全国組織の

日本山岳会だからこそ出来た活動だった。山形の佐藤淳志さん、秋田の福田光子さん、尾瀬の平野紀子さんや吉田理一さん、松本の田村佐喜子さん、山梨の里見清子さん、立山では五十嶋一晃さん等々。その方々が今も緑爽会々員として親交が続いていることは嬉しい。ほかに故人となった宮城の伊達篤郎・森佐和子さん、群馬の金子康一さん、日本自然保護協会の池田剛さん、山の自然学研究会の古田寛昭さんらのご厚情も忘れられない。難病に侵されながら最後までテーマ曲「ふるさとの山」を歌ってくださったシャンソン歌手・佐野民枝さんのことも。

私は以前から「全国PTA問題研究会」という在野の教育団体に関係していたから、初めは夏休みに計画し、親子連れの参加者を募った。第1回の際には、尾瀬湿原に子供たちの歓声が響きわたったものだった。その時の出し物は尾瀬を守った物語「ザ・尾瀬」で、劇団芸協（故・あずさ欣平主宰）の俳優たちが熱演してくれた。

本番を迎えるまで何度も現地入りして下見をするのだが、同行するのは総務を引き受けてくれた清野さん（全P研）だった。彼女をはじめ池田修平・小池興四郎さんら非会員の同志にも恵まれ、私の日常は殆どフォーラムINで占められていた。

大山さんは下見の際に快くマイカーを出して下さった。大手信託銀行に勤める大山さんの自家用車はゆったりとした高級車で、車に弱い私も酔うことはなかった。上手な運転で、早池峰にも行き、会津にも、小谷村を経て立山や伯耆大山にも行った。大柄な体躯の大山さんは、いつも悠然と構えて、渋滞や不測の事態にも対応できる頼もしい方だった。当時、牧子夫人とは一度もお会いしたことはなかった。ある時、ポツリと「母が認知症でね。まるでホトケ様のようになって・・・」と言われた。それで奥さまは一緒に外出できないのだと知り、私たちが大山さんの厚意に甘えていることを申し訳なく思った。

「来年は何処にいこうか」と夏の行事が済むと、私は地図を眺めて次の計画にふけた。その熱中ぶりを「お前は一年中、そんなことを考えているのか」と夫は呆れていた。

こうして訪れた鳥海山中腹の鶴間池では天然の樹林の間から役者が登場する宮澤賢治「注文の多い料理店」。桧枝岐では武田久吉をテーマにした企画に武田家の姉妹の参加を得て心に残る集会となった。富山では、播隆上人の墓前で尺八の献奏をした。宮城では「荒城の月」の箏の音と共に、支部長の伊達サマと殿さまごっこをして遊び、慶長遣欧使節・支倉常長の子孫も参加して下さったのが忘れ難い。現地の実地調査だけでなく、歴史や文化を総合的に学ぶのが狙いであった。顧問に国見利夫（日山協）・矢倉久泰（毎日新聞）・室俊司（全P研）の諸氏を据えていたから、どこでも信頼して貰えた。顧問の中で、今、健在なのは矢倉さんだけである。一緒に行動した人たちも遺っている人は少なくなった。

フォーラム全盛期の大山さんは、私の夢を叶えてくれる力強い味方だった。労を厭わず、心やさしくて、信頼できる方だった。バスの定員を超えた場合には、マイカーに応援を依頼して目的地まで参加者を運んだが、そんな時にも大山さんは欠かせない戦力だった。

大山さんは、また山岳写真家としてもプロの腕前を持っていた。世界各地の名山を撮影して回っておられた。その一つ、「黎明のマナスル」が、日本山岳写真協会賞を受賞した時のこと。百年史委員の松本恒廣・南川金一両氏の推挙によって、その写真は『日本山岳会百年史』の扉を飾った。

喜んだ大山さんは、大きく引き伸ばした写真を両氏に贈呈した。額装した大きな写真は、普通の家屋には収まらない。そこで松本さんが持ち込んだ先は、江古田のネパール料理店「マサラ」だった。

(もう1枚は甲斐大泉「ロジ山旅」に飾られた)。「マサラ」は松本恒廣さんの縁戚だった。この店の女主人ミチさんは、かつて図書委員会がヒマラヤトレッキングをした時にカトマンズで世話になった「ホテル・オーロラ」の経営者・藤原黎子さんの遺児である。(この旅のことは、緑爽会報144号掲載の福田光子さんの文章に詳しい)。

早逝した藤原さんは松本さんの末弟松本浩男夫人明子さんの姉であり、また尺八で高名な藤原道山氏は弟に当る。思えば人の縁は面白い。



2008. 7. 16 暑気払いとスライドとお話し (JACヒマラヤ環境調査隊みやげ話)

中央黒のジャケットが故・大山恭司さん (写真提供: 松本恒廣)

やがて大山さんは、モノ言わぬ人になっていった。それでも山岳会が好きで、集会があると、はるばる大宮から出て来ておられた。彼が夜遅く帰るのを皆が心配するようになった。夫婦して鎌倉の養老ホームに入られたのは、それから間もなくのことだった。

逝去のお知らせに驚いてお悔やみの便りを出した私に、牧子夫人からご返事が届いた。

「子供たちが近くに住むこの地に移り住んで4年半、気候・自然に恵まれ元気に幸せに暮らして居りました。・・・(昨年)2月頃より様子が少し変わりました。医者は問題ないとのことでしたが、3月11日、脱力感と発熱のため入院となり・・・3ヶ月もせずに逝ってしまいました」。亡くなったのは2018年6月7日。享年81歳。

あの大山さんも、きっとホトケさまのようになって亡くなったのだろう。でも病みやつれた大山さんは想像できない。きっと鎌倉の大仏さまになられたのだと信じている。

遺された牧子夫人のご平安をお祈り申し上げます。

合掌。

~~~~ 《予告など》 ~~~~~

**3月山行**：3月23日（土）都留アルプス 雨天中止

山梨県都留市のほぼ中央に位置する都留アルプスは、市と地元の登山愛好家らが一昨年夏に整備した新しいハイキングコースで、標高600メートル前後の山並みが富士急行線に沿って東側に連なっています。稜線上では都留の街並みや冠雪した富士の眺めを楽しむことができます。

**集合**：10:00 富士急行線 都留市駅改札口外

**行程**：都留市駅→（50分）→蟻山→（40分）→長安寺山→（40分）→元坂→（50分）→展望台→（20分）→都留文科大学→（20分）→都留文科大学前駅

歩行時間3時間40分 下山は都留文科大学前駅、15時頃を想定しています。

※ 通常の日帰り山行の装備（一部やや急坂あり、ストック必携）をお願いします。

**担当**：小林敏博（CL）、夏原寿一（SL）

**申込**：3月17日までに夏原までご連絡ください。



【参考】・新宿駅発の場合の時刻表

|      | 新宿駅       | 高尾駅(乗換)     | 大月駅(乗換)     | 都留市駅   |
|------|-----------|-------------|-------------|--------|
| 《JR》 | 7:51(特快)  | ⇒ 8:27-8:44 | ⇒ 9:26-9:35 | ⇒ 9:49 |
| 《京王》 | 7:45(準特急) | ⇒ 8:37-8:44 | ⇒ 9:26-9:35 | ⇒ 9:49 |

※ 3月にはJR、私鉄ともダイヤ改正がありますので、時刻はご確認をお願いします。

#### 4月総会開催について

**日時**：4月20日（土）14時より **場所**：集会室

**議題**：2018年度事業報告・決算報告

2019年度事業計画案・予算案

その他

※総会終了後は「茶話会」（昨年度までを振り返って、今年度に向けて、など）

※出席の方には、新年度会費<1500円>を徴収させていただきます。

※同封の出欠連絡ハガキを**4月13日（土）**までに投函願います。

5月は山行を予定しています。担当は荒井会員（4月総会及び4月発行会報にて詳細連絡）

#### --- 編集後記 ---

毎年冬を前に、今年は寒いのか暖冬なのかと皆が予報官になって勝手なことを言うが、春になると結局どちらだったかよく分からないし、暖かくなりさえすれば、もうどうでもいということになる。歳をとると時間の進みが速いと感じるのはワクワク、ドキドキするようなことがないからだ、NHKの番組「チョコちゃんに叱られる」で言っていた。その点はそう思うが、寒い時間はなるべく早く過ぎ去ってほしいものだ。ようやく春近し。総会のご案内をする時期となりました。

今井田研二郎氏は会員番号1620番。色々調べましたが逝去年がわかりませんでした。（荒井正人）

<次号予告> 4月25日発行の主な内容

2月例会報告、3月山行報告、4月総会報告他

<皆様からの投稿をお待ちしています>